

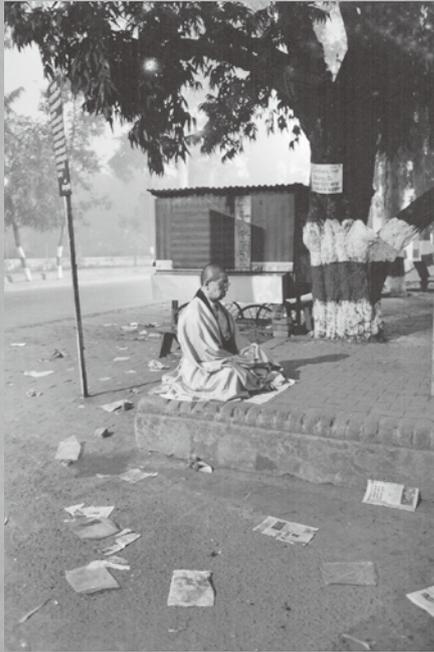


小林 恵智

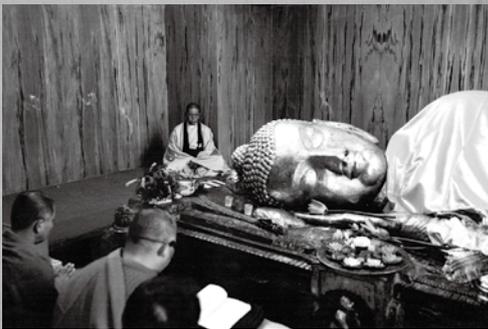
ヒューマンサイエンス研究所
理事長



「一日一生」を生き切る



インドでの乞食行脚風景



釈尊涅槃堂での説法風景

経済同友会歴も17年目。禅寺に生まれ8歳で得度。本師が遷化された18歳まで僧堂修行。師に「坊主臭い坊主は禅坊主ではない」と言い残され、安田講堂事件で目標をも失い、「取りあえず」私学に籍を置き1971年にウイーンで哲学、心理学、数学を学び、モントリオールに転じて精神身体医学(ストレス生理学)、シカゴで教育経済学、組織論を学び、アーリントンの米国国防機関で組織生産性の研究生活を送った。1988年から

経営コンサルタントを経験し、帰国後「経営代行会社」を起業。1日16時間、365日、18業種前後を15年近く支援し、2001年に経済同友会入会。その2年後に“余命6カ月宣告”を受け、全ての事業を辞し、禅坊主^{かえ}に還って南伊豆で雲水生活に戻った。

ところが、余命宣告から1年が過ぎても“迎”が来ず、“逝くならインドで”と、北インドの乞食行脚^{こっじき}に“片道切符”で出た。

写真は、経済同友会の出張授業で私を知った杉並区の父兄がインド旅行中に撮影したらしく、最近に送られてきた「涅槃堂^{ねはん}での説法風景」と「ブッダガヤからクシナラへの乞食行脚風景」。なお、行脚50日目に路上で行き倒れ、デリーの病院で蘇

生処置を受けて帰国。縁は異なるもので蘇生を担当した医師はカナダ時代の友。帰国後、彼の誘いで12人の研究者と幹細胞・免疫細胞療法研究に研究者というより“末期がんの喋れる実験動物”として参加し、今年で生きながら十三回忌を迎えた。

経済同友会では「学校と経営者の交流活動推進委員会」に16年所属し、近未来社会の中心となる中高生に、究極の産業革命、AI・ロボ

ット時代に続く重力制御技術が生まれる量子時代、シンギュラリティを超えた社会で全ての価値観が変わる真のグローバル時代をいかに幸せに“自分経営者”として生きるかについて200校以上で講義、“今できること”にのみ全力を尽くし、「一日一生」の人生を今日も歩んでいます。